大田区教育委員会教育研究推進校　研究発表会
教科「おおたの未来づくり」　校長挨拶文

本日は、本校研究発表会にあたり、横浜国立大学の野原卓先生には貴重なご講演をいただき、誠にありがとうございました。本校の研究を価値づけていただいたことに心より御礼申し上げます。

また、この２年間、教科「おおたの未来づくり」の研究を進めるにあたり、大田区教育長・小黒仁史先生をはじめ、大田区教育委員会の皆様方には、「そもそも、ものづくりといえば矢口小だ」という大きなご期待とご支援・ご指導をいただきました。本当にありがとうございました。そのご期待に、本校が十分応えられたかどうかは分かりませんが、教育研究推進校として、教員たちが全力をあげて事例を作ってきたことは事実です。

この研究は、令和４年４月には「未来ものづくり科」という名称で始まりました。じつは本校は平成１６年から１８年にかけて、文部科学省の研究指定を受け、「ものづくり科」を創設する研究をしてきた背景があります。正面玄関に展示しているべか舟の「矢口魂心丸」も、多摩川の矢口の渡しを再現するために、当時の６年生が当時まだ地域に残っていた船大工さんの支援を受けて作り出し、まだ寒い３月に多摩川を渡るというチャレンジを実現しました。ある意味、こうした地域と連携しながら何かを生み出すという、本校の伝統を復活させることができた、今回の教科「おおたの未来づくり」の取組となったと感じます。

本校の教員は、この２年間、大田区の皆様に、教科「おおたの未来づくり」の学習過程を示すべく、道なき道を切り開きながら懸命に努力してきました。先週の全校朝会で週番として児童に語った初任教員の言葉を借りれば、「先生たちも必死に頑張ってきました」、そんな研究でした。しかし校長として私が教員を最大に褒めたたえたいことがあります。それは「矢口の子供たちは間違いなく成長した」という、この取組の最大の成果を出してくれたことです。１年生から６年生までが、常に外部意識に立ち、自分のためだけでなく、誰かのために探究に次ぐ探究をしながら学ぶという学習行動を習慣化してきたことによって、矢口っ子たちは、素直で優しい、地域に愛される、宝物のような子供たちに育ってきました。このような輝く子供の姿こそ、教科「おおたの未来づくり」で私たち教師が創り出せる「未来の希望」なのだと、今、私は確信できます。

今後、令和７年度より、大田区内全小学校で教科「おおたの未来づくり」が行われますが、オール大田の子供たちが、一人ももれなく探究学習に夢中になり、「社会のために、大田区のために貢献するぞ！」という志を育くんでいくことを期待し、本日の研究発表会のあいさつとさせていただきます。

皆様、本日は長時間にわたりご参観いただき、誠にありがとうございました。

令和５年１１月２７日

大田区立矢口小学校長　井上光広